# 清富記

水上勉

新潮社

清富記（せいふき）

一九九五年一月三〇日発行

著　者　水上勉（みずかみつとむ）

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一　〒一六二
電話（営業部）〇三―三二六六―五一一一
（編集部）〇三―三二六六―五四一一
振替　東京四―八〇八

印刷所　大日本印刷株式会社

製本所　加藤製本株式会社

価格は函に表示してあります。

© Tsutomu Mizukami 1995, Printed in Japan
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-321121-0　C0093

# 目

# 次

蟋蟀 7
清富記 31
三峽異聞 59
狂猿記 87
飛奴記 113

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

瘋癲記 143
南宋望郷悲譚 (一) ―西湖の忘れ笛― 171
南宋望郷悲譚 (二) ―西湖黄昏― 193
薙髪記 213
慧能 231

**装画**・八大山人筆「安晩帖」より（泉屋博古館蔵）
**題字**・水上　勉
**装幀**・新潮社装幀室

# 清富記

蟋

蟀

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

# 1

北宋が女真族の金に攻められて、それまで東京とよんでいた首都（いまの開封）を金にゆずり、南の臨安（いまの杭州）に都を遷してまもない頃である。

帝は高宗の時代。臨安は仮行在所とよばれて、宋国はいつの日にか、旧都を奪回したいものだと、金のスキをうかがっていた。東北部を出て、東京は陥れたものの、永年漢民族がととのえた首都の、洗練された文化についてゆけず、荒々しい武力のみでは、平穏な国がおいそれと礎けないことも思い知った女真族が、やがて北へ兵力を退いて、南攻の力を弱めていた頃だった。

徽宗は、北宋代々の皇帝のなかで、もっとも遊興を好んだといわれている。そのとおりで、東京の城市は、皇城を中心に、坊廂が櫛比し、庶民にまで風流が沁みとおって、城内

に瓦子とよばれた歓楽郷がにぎわい、酒楼、妓館、飲食店などがさかえ、貴人、富民の子弟らの遊蕩の巷になった。臨安もこれに習って、街造りが行なわれ、東京をしのぐ繁昌ぶりだった。「西湖老人繁勝録」や呉子牧の「夢粱録」によると、四川からきた百余人もの劇団員を抱える一座が興行で成功し、三百人もの団員をもつ福建の鮑老劇が人気を博した様子が記されている。

市街は、西湖東部のデルタ地帯にひろがり、運河の岸に沿うて、いくつもの桟橋と水門があり、瓦子はその岸に近かったので、湖上に画舫をうかべて、管弦を奏でる遊客のさわぎと楽器の音が、周りの山々にこだまして、少し時代はおくれるけれど、ここを訪れたマルコ・ポーロが、東洋一の水辺都市だと記した面影が、すでに、この時代に、礎かれていたことになる。

文化人皇帝の徽宗が死んで百年ぐらいたった頃だ。理宗の代に、この臨安の庶民街の一角、詳述しておくと、市内を流れる運河に沿うた衆安橋の橋だもとに王と名のる八百屋があって、そこの息子の王仁は、幼ない頃から、蟋蟀を集める才があった。

蟋蟀はむろん、あの昆虫のことである。南宋の武人や智識人間には、この虫を飼って、闘わせる風習があった。いかにも太平楽時代の趣味といえるが、実際はこの当時は太平ではなくて、北辺でしょっちゅう、金のまきかえしに遭遇して戦さもあったのだ。南宋は、

常に北へ出兵を余儀なくされたので、使役や、税金もきびしかったはずだけれど、皇帝や宰相に歓楽好みのところがあると、首都あげて、そのような遊蕩の気風が蔓延するものらしかった。蟋蟀を飼ってあそぶ慣習なども、あるいは、その一つだったかもしれない。

蟋蟀には、いろいろな種類があった。人々が飼育して楽しんだ虫はおおむね大柄のものだったようで、鈴虫などと同じく鳴き虫の一種である。日本でいうエンマコオロギ、または、ツヅレサセコオロギのたぐいだった。だいたい体長は、二十ミリから三十ミリぐらい。頭がまるくて、黒あめ色で、艶がある。前足もうしろ足もはなはだしい筋肉質で長くのび、ふたつ眼の上に白灰色のすじがあって、まゆ毛のような黄色い帯がとおっているところなど、如何にもつよそうで闘争心旺盛だと尊ばれたらしいが、八百屋の息子は、どういうわけか、湖岸や、野っ原を一日じゅうさまよって、蟋蟀をみつけると、巧妙に捕えて、麻がらでつくった捕獲籠に入れてもち帰り、親にも自慢して、店で売っている南瓜、ナスの類をあたえて、大きく育て、仲間と闘わせてあそんだようだが、負けることはめったになかった。強い虫を集める技を心得ていたのだった。虫捕り少年の名が城内につたわると、どこからともなく、武人や富豪の家の使い人が現れるようになり、八百屋の前に、馬車をとめて、少年の貯えている虫の中のつよそうなのを所望して、相当の額で買入れる客がふえた。王一家は、しがない、野菜売りよりも、息子が虫捕りの技をつかって、収獲してくる

蟋蟀を売る日が多くなった。むろん、これは貧しい一家にはほくほくもので、父親は、王仁少年を朝早くたたき起して、弁当をもたせ、西湖岸へ、虫捕りにゆけとせきたてる。

この八百屋の隣りに、沈丁点という一杯呑屋があった。運河に臨んだ片側商店の通りなので、水門があくと、すぐ眼下に湖から画舫がもどってくるのがみえる。画舫というのは、西湖名物の、今日でも見られる屋根つきの館ぶねだ。妓館へ帰る酔客ものっている。むろん娼妓らの歌いさざめく光景も岸から望見できる。それゆえ、一杯呑屋は繁昌し、表に竹製の床几(しょうぎ)をだして、見物客をよびこみ、または、朝からここにきて閑人が一服したのである。呑みながら、人や舟の往還を眺めくらす風情である。

沈丁点の店頭でも、隣家の八百屋の息子の持ち帰る蟋蟀を楽しみにする客がいた。名は名のらぬけれど、一見して武人のくずれと見うけられる者、ボロ衣をまとった僧侶。あるいはうらぶれた道者ふうの男。近くの富豪の家の使役人などである。蟋蟀を闘わせる趣味は、何も貴人、武人にかぎらない。庶民もまた、ひまがあると、人の見物する通りで闘わせてあそんだのだ。むろん金や物を賭ける者もいた。見物しているうちに、どっちが勝つか負けるかに賭けて勝負する連中もいた。日本でいう闘鶏であろう。

宋の人々は、蟋蟀を飼うのに、それぞれ趣をこらした壺をもっていた、といわれている。フタに穴のあいたインキ瓶の二倍ぐらいの容器だけれど、香木をくりぬいたり、べっ甲や、

鹿の角をあしらった飾りをつけた容器に飼って楽しんだようだ。容器にこったのは、むろん、富者や武人だった。気に入った色の、つよい虫を家来や使役人に捕獲させて、それを自分で飼って闘わせるあそびに、夜も日もあけなかった。いまも、杭州の古道具屋へゆくと、この時代の蟋蟀の壺が店頭で見つかることがある。相当数の容器が、人々に保持されていた名残りだろう。

さて、真夏のあつい日々もすぎて秋風のたちはじめた頃だった。朝から、父親にせきたてられて、虫捕りに出かけた王仁少年は、清波門の近くの草原で、不思議な蟋蟀に出くわした。それは、先ず、あたりからきこえてくるどの虫の声よりも高くて、すきとおってきこえたそうだ。少年は、名人であったから、だいたい、その声で虫の大きさや、品種がわかったのだが、首をかしげたいほどのいい声だったという。どこか、女のすすりなくような声でもあった。声のする方へ少年は、丈高い秋草をかきわけて行くと、びっくりした。枯れかけたよもぎのなかに一匹の大蝮（おおまむし）がとぐろをまいていて、蟋蟀は、その蛇の頭の上にちょんとのっかって鳴いていたそうな。少年は、虫はとりたいが、大きな蛇に困った。そろそろ秋がきている。蛇が獰猛（どうもう）になる季節だった。冬眠のために、キバをぬいて地にもぐるのは、蝮の習性で、そのキバも、通りかかった人間の足はもとより、鼠にでも、猫にでも、とびかかって嚙みついて、獲物の体内に毒のキバをのこして去るのである。王仁少年

は、嚙まれてはたまらないから、何とかして、頭にとまった蟋蟀だけとりたいものだと即座に考えて、足もとにちらばっていた小石を拾い、蝮めがけて投げつけた。すると、蝮は、おどろいて、逃げてゆく。そのうしろへ、さらに小石をぱらぱら投げた。すると、蛇の頭の上にいた蟋蟀はぴょんとよもぎの葉のうらにとまって、じっとうごかなくなった。蝮が先の方へ去るのを待って、王仁はゆっくり近づいて、手をのばし、いつものようにたくみに、蟋蟀を傷つけぬように押えて籠に入れた。

大きな収穫であった。いつもより大きくて、蝮の頭にとまっていたのだから、いかにも豪気な虫に思えた。きっとつよい虫にちがいあるまい。王仁は、そう思うと、早く親に見せたくなって八百屋へ帰ってきた。まだ、夕刻に間があった。隣家の沈丁点の店に客はいて、運河を入ってくる何艘かの画舫もみえた。あいかわらずにぎやかな運河沿いの商店街であった。

「どうだい、捕れたかい」

親爺さんがきいた。

「つよそうなのが一匹、捕れたよ、お父さん」

王仁はにこにこ顔で、清波門の草っ原で見つけた時のよろこびをはなした。

「そうかい、蝮の頭にいたのか、そんな豪気なヤツだったか。きっとつよいぞ」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com